

古道調査・三峯参詣道（三峰口駅～強石～大達原～大輪）下見調査報告書

2023. 2. 27

日 時 : 令和5年2月26日(日曜日)、晴れ

メンバー: L 山崎保夫、宮崎 稔、中嶋信隆、林 信行、浅田 稔、吉田寛治、高橋 努、
野口勝志、松本敏夫(計9名)

コース記録:

秩父鉄道・三峰口駅(9:00-9:35 出発)～巣場新道分岐(9:41)～東屋(9:47)～馬頭尊(10:10)～分岐「巣場-強石」(10:17)～巣場・双体道祖神(10:30)～熊埜宮・産泰宮(10:34)～万年橋(11:10)～国道140号(11:14)～御岳山登山口入口(11:18)～三峯参詣道(11:21)～東京発電(株)大滝発電所・送水管(11:26)～国道140号に合流(11:32)～道標「大達原方面-大血川・大輪方面-強石方面」(11:36)～道標「大達原を経て大輪方面-強石方面」(11:40)～林道・道標「大達原を経て大輪方面-強石方面」(11:50)～光岩稻荷神社(11:50)～道標「大達原を経て大輪方面-強石方面」(11:58)～鉄パイプの橋(12:06)～コンクリート製の四角い箱(12:08)～馬頭尊(12:15)～馬頭尊・大滝村馬持中(12:27)～東屋(12:29)～大達原の手掘り隧道(12:37)～昼食(12:52-13:25)～道標「大達原を経て大輪方面-強石方面」(13:30)～御廣稻荷大明神(13:33)～道標「強石方面-大輪方面」(13:35)～大達原高札場(13:36)～大達原稻荷神社(13:40)～庚申明王(13:50)～道標「神岡方面(裏参道)-大輪方面(表参道)-強石方面」(13:50)～子育て地藏尊と見送り観音(14:08)～竈三柱神社(14:16)～大輪・三峯神社一之鳥居(14:30)～登龍橋・丁目石(14:32)～西武観光バス・大輪バス停(14:43)～三峰口駅(14:53)

記録

埼玉支部の古道調査は「十文字峠越え」、「雁坂峠越え(旧秩父往還)」、「奥武蔵古道」及び「三峯参詣道」の4コースが選定されています。三峯道コースは、三峰口駅(旧贅川宿)から猪鼻、強石、大達原、大輪、三峯神社(表参道)、妙法ヶ岳、地藏峠(お経平を含む)、大陽寺、大血川沿線(大陽寺への参詣道)、巣場新道経由で三峰口駅に戻るコースを検討する予定です。かつて秩父から甲州に抜けるには、旧荒川村猪鼻から旧大滝村強石との境を隔てる白滝沢を渡り、土壇場地蔵から上強石及び杉ノ峠を経て落合に下る旧秩父往還と、上強石から下強石に下り大達原・大輪を経て三峯山に至る旧三峯街道(または三峯山道、三峯参詣道など)が知られています。三峯参詣道に関する基本的なコースは、歴史の道調査報告書・第11集・秩父甲州往還(埼玉県教育委員会)を参照しました。また、明治43年測図「三峰」には、猪鼻から上強石・杉ノ峠を越えて落合に向かう旧秩父往還の記載がなく、既に猪鼻から強石・大達原・大輪・落合への道が記されていますので、明治中頃には荒川左岸の道が整備され、「杉ノ峠越え」の旧秩父往還は利用されなくなったものと推測されます。一方、国土地理院の2万5千分の1地形図「三峰」には、猪鼻から土壇場地蔵を経て上強石に向かう登山道の記載はありませんが、強石から杉ノ峠を越えて落合に至る登山道が秩父御岳山

への登山道として明記されています。更に、強石の数百メートル南の国道 140 号から大達原を経て大輪に至る道も記されています。

また、大滝村誌に「強石のにぎわい 旧秩父往還は白滝橋の手前から上強石へ向かい、杉の峠を越えて落合へ通じていた。これとは別に『三峯山道・新古両大滝道』が猪鼻からまっすぐに『石出（いだ）し』を通過して（下）強石に至る道があった。『石出し』という地名は、たえず石が押し出す（崩壊する）危険な場所という意味である。その頃の強石は岩石が屹立して通行困難なことで知られていた。家は四軒あった。強石から大達原へ通じる道は現在の国道から 100 メートルほど上にあり、手掘り隧道ができる前は『不動岩』の上へでる絶景のコースだったという。このコースが地元の人々の生活道路であり、三峰参詣人が行き交ったことを推測させる馬頭尊の石塔が五基残っている。その中には宝暦六年（1756）銘のものもある。」と記されています。強石から大達原に抜ける道は急峻で崩れやすい地形が原因で、かなり危険な個所を通過していたことが示されていますが、下強石から大達原を経て大輪に抜ける旧道は「三峯山道」と表現されています。既に実施した古道調査で、土壇場地蔵から上強石を通る道は白滝沢に架かる橋が壊れ、旧道が不明瞭となり廃道同様の状況であることを確認しております。贅川宿から猪鼻・強石の旧秩父往還及び巣場新道経由で強石・上強石・杉ノ峠を越えて落合に至る旧秩父往還は、「古道調査・秩父往還」に関する下見調査報告書を参照ください。

三峰口駅から猪鼻、強石と荒川左岸の国道 140 号を通り、下強石に至るコースは歩道がなく交通量が多い国道沿いを歩くことになるため、古道歩きには推薦できないと判断されます。そこで今回は、巣場新道経由で下強石に至り、三峯山道により大達原から大輪に下り、三峯神社の一之鳥居及び表参道の登山口に当たる登龍橋並びに表参道の丁目石の出発地点である五十二丁目石を目指すこととしました。強石から手掘り隧道があることで知られる大達原への旧道は急峻で崩れやすいことで知られていますので、三峯参詣道として知られる大輪までの三峯山道が、現在どのような状況になっているか確認することを目的としました。



三峰口駅



巣場新道分岐（左）



東屋

三峰口駅から白川橋に向かって北西に進み、荒川の手前で左側に分岐する巣場新道に入ります。巣場新道は荒川右岸の急峻な山腹を巻くようにして巣場または強石に至る舗装道です。国道 140 号に沿って荒川を挟み、南面して日当たりのよい猪鼻地区の家並が白いガードレール越しに遥か下方に臨めます。一方、巣場新道側は薄暗い日陰で、民家はほとんど見当

たらず住居や耕作に適した土地柄ではありません。途中、右手に東屋があり猪鼻方面が眺められます。2年前の古道調査時には、左側の斜面が急なためが斜面崩壊防止の黒い大型砂利パックが三段に積まれていましたが、今回はその上部の急斜面に落石防止用のネットが張られていて、道路整備が着実に進んでいました。また、前回は、二瀬ダムの広大な土砂置場（かつては老人ホームの施設）であった場所がすっかり整地され広大な広場となっています。荒川を挟んだ対岸に、旧荒川村猪鼻と旧大滝村強石の村境である白滝橋が確認できます。白滝橋が入口となる大滝トンネルが完成すると落合に直接抜けることになり、強石、大達原や大輪は観光事業から取り残されることになりそうです。



巢場新道



二瀬ダムの土砂置場跡



白滝橋方面（大滝トンネル）

左側の崖下に安置された馬頭尊文字塔（裏側に明治の文字）を越えると右側に民家が現れます。丁度、赤い屋根の上を野生サルが威嚇しながら飛び回っているのを目撃しましたが、住民の方もあきらめ顔なのが印象的でした。送電線の鉄塔の隙間から大滝発電所（大正9年完成）の送水管が確認できます。この先は巢場（左側）と強石（右側）との分岐で、道標「巢場0.4km-御岳山4.4km」が白いガードレールの上に顔を覗かせています。巢場新道は大陽寺参詣道として、秩父往還との分岐である「白久の渡し」への道から左に分れ、現三峰口駅の前を通過して巢場から荒川沿いに大血川の大陽寺入口に向かう道があったようです。明治43年測図「三峰」には巢場から荒川右岸沿いに大血川から大陽寺へと続く道が記されています。



馬頭尊



馬頭尊の先にある民家



巢場への道標

巢場と強石の分岐を左手の巢場方面に進むと、前方に見える三角形の山頂近くに大きな岩壁が確認できますが、これが光岩（聖岩）と考えられます。光岩はボルダリングやクライミングを楽しむことが出来るとのこと。南面して陽光に溢れる巢場の昔懐かしい家並みを過ぎると、最奥部の左側に双体道祖神が安置されています。巢場の双体道祖神の説明板

には「秩父市指定有形民俗文化財 巢場の双体道祖神 所在地：秩父市大滝 241 番地 指定年月日：昭和 45 年 11 月 3 日 道祖神は、外からの疫病や悪霊を防ぐために集落境等に造立される。また、旅の安全や縁結びの神としても信仰される。地元では『ドウロクジン』とも呼ばれる。この道祖神は板碑型で、高さ 47cm、幅 26 cm、厚さ 17cm、石質は砂岩で、切石の基壇に座している。碑面には、男神（向かって左）、女神（右）が浮彫されている。造立年代は江戸時代中期とされている。平成 21 年 3 月 秩父市教育委員会」と記されています。また、大滝村誌に「巢場の双体道祖神（村指定文化財） 双体道祖神石像は信州系の信仰を伝えるものとされ、秩父地方には主要街道沿いに数体確認されている。本村内では巢場に一体あるだけで、ほかの地区には見られない。旧大陽寺参詣道の石標がある荒川村白久にも一体ある。白久から巢場へ通じる旧道の上・下に二体あるので何かいわれがあるのかもしれない。」と信州と秩父との交流や三峯信仰との関連を窺わせる興味深い内容が記されています。予想外に小さな道祖神の浮彫ですが、巢場の最奥部に設置されていることから、牛頭天王（八坂神社）同様にかつての村境に設置され、疫病などの村内への流入を防止するために設置されたものと推測されます。道祖神の上部に紙垂が下げられていて、三峯神社のお札（耕地安全・秩父市大滝と記載あり）が立てかけられていましたが関連は未確認です。



巢場から光岩



双体道祖神の石像



道祖神と天王宮？

道祖神の背後の高札場のような形の社（？）に「天王宮改修工事寄附者名簿・昭和五拾年拾月十八日完成」と記された紙が貼り付けられていて、この建物が天王宮（牛頭天王を祀る八坂神社？）ではないかと推測されますが詳細は未調査です。道祖神の右側の小道を登ると神社があり、扁額には「熊埜宮」及び「産泰宮」と記されていますので、祀られた神様からも修験者たちの関与が推測されます。社の右側には木製の小祠が、左側には石の小祠が、併せて 10 祠以上の摂社・末社が並んでいます。その一つに「奉遷宮大輪田津見命（明治三十年九月吉日）」と海の神様のお札が納められていました。大滝村誌に巢場の産泰神社（祭神：木花開耶姫、浅間神社本宮の祭神を合祀）及び熊野神社（祭神：櫛御食神・速玉男神）の記載がありますが、天王宮は記されていません。産泰神社は安産や子孫繁栄の民間信仰として知られています。明治 43 年測図「三峰」に記されている巢場から大陽寺へのルートを探してみましたが、それらしい道は確認できませんでした。一方、巢場から荒川越しの遥か上部に上強石の家々が遠望できます。



神社



熊笹宮・産泰宮の扁額



小祠の確認

巢場と強石との分岐に戻り、万年橋で荒川を越えると国道 140 号に合流します。左側に標識「三峰口駅 2.1km—御岳山」があり、三峰口駅から秩父御岳山への登山道として巢場新道が利用されているものと思われます。国道を右側（猪鼻方面）に数分進むと古い強石の街並みが続き、左側に道標「御岳山登山口入口」があります。分岐には「御岳山遊歩道」や「強石」の説明板も併せて設置されています。左側の強石の説明板には「秩父多摩甲斐国立公園及び大滝の玄関口である強石は大正時代に県道が開通された頃から物資が集まる交通の起点として大いににぎわいを見せた。馬車の発着点、木炭の間屋、銀行の支店、飲食店、菓子店、旅館などあらゆる種類のお店が軒を連ね、昭和 40 年代までこのにぎわいは続いた。現在は、宿が 1 軒営業し、ほぼ生活の場となっている。強石は巨大な岩石が多く、落石があり交通の難所であったため名づけられたといわれている。」と記され、かつて物資の中継所として賑わった強石の写真や杉ノ峠への登山ルート詳細図が掲載されています。現在の国道沿いの強石はひっそりとした街道筋に変わり、昔の面影を残すものは古い商家のみです。



万年橋



強石の街並み



御岳山登山口への分岐

強石の説明板から数分西に登った場所に、左へ分岐する古い道があります。旧秩父往還は土壇場地蔵から上強石を経て杉ノ峠へと向かいますが、上強石から降って下強石のこの場所が三峯参詣道への合流点です。古い街並みが残る道幅 2 メートル弱の三峯道を辿ると東京発電(株)大滝発電所の大きな二本の送水管の上を越えます。この先、右側の斜面は土砂崩れがあり、左は緑のフェンスに囲まれた荒れた旧道となり、やがて左下の国道 140 号に合流します。道標「大達原・大輪方面—強石バス停方面」が入口に設置されていました。



強石の街並み（三峯道）



大滝発電所・送水管



国道 140 号に合流

国道 140 号を大達原方面に数百メートル進むと、右側に道標「大血川・大輪方面－強石方面－大達原方面」があり、「遊歩道」の標識が付いた緑のフェンスと石段が国道横の斜面に設置されています。ここを登ると薄暗い杉林の植林帯の山道に変わり、道標「大達原を経て大輪方面－強石方面」・「山道」を越えると左側に緑のフェンス、倒木などがあり、古道の雰囲気が残る三峯道に入ったことが実感できます。左側荒川の対岸には早春の陽ざしを浴びた巣場の家並みが望めます。前方上方に白いガードレールが見えると間もなく舗装道に合流します。車道の横に道標「大達原を経て大輪方面－強石方面」があり、この先の左側は光岩稲荷神社への急な参道（坂道）があります。



大達原への入口



三峯道へ



車道への合流地点

光岩稲荷神社の説明板には「稲荷社の祭神はウカノミタマの神であり、キツネはそのご眷属（お使い神）であるが、時にはこれを混同し又はうっかりして狐が祭神そのものと思われる場合がある。この稲荷社はいつのころ祭られたか定かではないが往還を通る人が化かされたとか、酔っ払いが送られたとかの昔ばなしが伝えられている。祭日は二月初午の日、昔はこの近くに草葺の屋根の学校があり、後大達原に移り、大正二年現在の光岩小学校となる。」と記され、往時でもキツネが現れそうな寂しい道であったことが想像できます。急な参道（坂道）の右側は安全に配慮した為か鉄パイプが設置され、鬱蒼とした樹木に覆われて赤い鳥居の奥に、しめ縄に紙垂が付けられた赤い稲荷社が尾根上に鎮座しています。扁額には「光岩稲荷神社」の記載があり、豊作や商売繁盛を願う地元民の信仰と共に、通行人で賑わった往時が偲べれます。



光岩稲荷神社の説明板



赤い鳥居



光岩稲荷神社

車道を進むと右側に分岐・道標「大達原を経て大輪方面―強石方面」・「光岩小学校を経て光岩バス停方面」があり、緑のフェンスの横の分岐（坂道）を少し登ると歩きやすい旧道に変わります。右側に大きな岩塊が現れると鉄パイプで造られた狭い橋が小さな涸沢を越えて架けられています。沢筋から土砂が押し流されたため旧道が崩壊し、急遽、仮橋が架けられたものと推測されます。旧道の左はロープで保護柵（？）が設置され、右側に斜めの屋根が特徴的なコンクリート製の四角い大きな箱型の建物（高さ 2m×幅 2m×奥行 2m弱ほど、元は給水用の貯水槽？）が現れます。中を覗いてみると底には、かち割った石で平に敷き詰められていました。また、送水用と思われる黒い大きなホースが周囲に散在していました。



車道から旧道へ



鉄パイプの仮橋



コンクリート製の四角い箱

右側は岩壁のような崖が連なり、左はロープの柵が延々と続く狭い旧道は、途中、沢筋に土砂崩れの跡が生々しい場所が残りますが道は平坦で明確です。更に進むと四角柱に馬頭尊（文字塔、二月吉日・道の右側）と刻された石碑がひっそりと佇んでいます。「秩父甲州往還」に「馬頭観音、明治四四（1911）年銘、大滝村馬持中」と記されている石仏と思われます。大滝村誌に「金蔵落し 荒川の中流域からさかのぼって本村域に入ると、幽谷深淵の連続となって、川幅も狭くなり難所が出現してくる。その第一関門が光岩小学校の上流『金蔵落し』である。昔、ここで遭難した金蔵という人の名前がつけられた難所で、約 200 メートルの間、両岸が絶壁になっている。旧秩父往還はここをさけて高巻き、大達原へぬけていた。」とあり、荒川沿いの道に「金蔵落とし」と呼ばれる危険な崖を高巻きしていたことがわかります。三峯道の右側は岩壁がそそり立ち、左は国道まで急な斜面が一気に下っています。運搬用の馬もここから落ちては助からないと思われます。かつて強石から大達原にかけて、荒川沿いの道は両側から切り立った崖が連なり、人馬の通行の妨げになっていたことが推測されますので、遠回りでも比較的安全な杉ノ峠を越える尾根道が利用されたものと思

われます。



岩壁のような崖



土砂崩れの跡



四角柱の馬頭尊

旧道を進むと右側に馬頭尊・大滝村馬持中（明治四十四年、二月吉日）が確認できます。古い馬頭尊の説明板に「馬頭尊 観音さまといえば思い浮かべるのは柔和な顔。しかし馬頭尊だけはこわい顔で馬の守り本尊、本来ならそのお姿をまつべきであるが、略してこの付近に見られる馬頭尊の文字を刻んで馬の交通安全を祈ったが、大滝谷（やつ）など道が狭く崖に沿っているところでは、馬の遭難現場に慰霊のために建てられたとも聞く。トンネル口のもは嘉永三年（1850）に建てられ、他の二基は明治四十四年、大滝村馬持中である。他の一基は大正十四年に建てられている。」と記されていました。なんとなく和式の墓石を思わせる佇まいで、共に働いた馬の供養のために建てられた馬頭観音塔と思われます。前述の四角柱の馬頭尊も明治四十四に大滝村馬持中により建てられたことが説明板の記載から分かります。この先の左側に東屋があり、ベンチが設置されていて休憩には最適な場所です。ただし、この時期は日陰になっているのが残念です。



左側が切れ落ちた三峯道



大滝村馬持中の馬頭尊



東屋にて

一段と大きな岩壁状の白い崖が現れると大達原の手掘り隧道（大達原トンネル）の強石側の入口です。大滝村誌には「大達原の手掘り隧道 隧道が開通すると、強石側の隧道には、三峯神社への参拝人や運送業者を相手に茶店（大輪の大島屋の出店）ができた。隧道開削に関しては資料の所在が不明のため、詳しい事情はわからない。言い伝えによると、強石の吉田悦太郎が測量・設計し、工事監督は浜平の山中幸四郎（昭和11年没）がつとめ、荒くれ人足たちをつかうのに苦勞したという。この隧道の高さは五メートル弱ある。人馬の通行以外に、木材その他の物資を搬出するために開削されたことが考えられる。」とあり、物資運搬用に天井が高いトンネルであることが特徴です。旧道の右側には自然石に刻された馬頭尊文字塔があり、「秩父甲州往還」には嘉永三年（1850）と記載があります。左の岩の上部に馬頭尊の浮彫像が設置され、「秩父甲州往還」には年代不詳となっています。浮彫像は逆

光の為に、残念ながらはっきりとは確認できませんでした。トンネル入口にある大達原の手掘り隧道（大達原トンネル）の真新しい説明板には「強石から落合までは秩父帯の石灰岩やチャートが帯状に分布し、険しいV字谷が続きます。谷筋は通行困難で古い街道は尾根を通っていました。明治中期に石灰岩を手で掘ってくり抜きトンネルが作られました。三峯神社参拝客でにぎわい、ここには茶屋もありました。隧道東側にあった茶店『大島屋』は、現在も三峯神社参道で営業している。」と記され、三峯参詣者には大変有用なトンネルで、開通を祝う往時の人達が茶屋の前に多数集合した写真が説明板に掲げられています。手掘り隧道を覆う巨岩の壁には夥しい数のハーケンが残されていて、岩登りの練習に利用されたものと推測されます。



手掘り隧道



馬頭尊文字塔



馬頭尊（浮彫）

また別の古い説明板には「手掘り隧道 昔はもっと上の方に道があり、『左 三峯道』という道しるべ石もある。このトンネルの掘られたのは恐らく明治中期以後と思われ、監督は浜中の山中幸四郎（昭和11年77才没）で、何寸掘れば何銭と日当を払ったらしく、どこから入ったのかわからない荒くれ人夫を使うのに苦労したと伝えられる。幅員3m45、高さ4m80、長さ40m50、大正末年、現在の国道140号線の開鑿まで、三峯参詣の街道としても重要な役割を果たした。環境省・秩父市／奥秩父源流」と記されています。トンネルが無かった時代にはこの巨大な岩塊を乗り越えて旧道が続いていたものか、想像すらできない状況です。手掘り隧道のある巨岩は不動岩と呼ばれていたことが「秩父往還いまむかし」に記されていますが、風土記稿には「不動岩 大達原組の内、字茶屋尾根にあり、荒川の北岸にそひへて高さ二十餘丈、幅一町許、岩上に十餘株の松ありて、いと景地なり」と絵図入りで紹介している景勝の地であったようです。トンネル内は予想外に広く明るいのに驚かされます。また、ドリル状の器具で掘削したものか、半円筒状の穴や削り跡が多数のこされていました。通行の難所を改善するために地元民の悲願の結晶としての手掘り隧道を実感ができます。明治の文豪である幸田露伴は、熊谷から三峯神社まで旧秩父往還を旅した際の紀行文を「知々夫紀行」（明治32年2月発行）に著しましたが、贅川宿から強石を経て手掘り隧道を越えて大輪に至る経路を「贅川より隧道を過ぐるまでの間、山ようやく窄り谷ようやく窮まりて、岨道の岩のさまいとおもしろく、原広く流れ緩きをもて名高き武蔵の国の中にもかかるところありしかと驚かる。」と記し、東京周辺の荒川流域の地形に比較して、秩父

における荒川の急峻な谷や兩岸の岩壁などが印象に残ったようです。



手掘り隧道（強石側）



隧道内部



隧道出口（大輪方面）

杉林の緩斜面につけられた旧道を数分進むと道標「大達原を経て大輪方面－強石方面」・「山道」があり、民家の傍の車道に出ます。右側の民家の横には覆い堂の中に「御廣稲荷大明神」と記された四角い自然石でできた大きな石碑があります。個人の所有ですが「御廣」とはどのような意味なのか興味深い命名です。「秩父甲州往還」ではトンネルを出て右手に妙見社があると記されていますが、右側の民宿の横の狭い道を登ると妙見社と稲荷社が並んで建っています。一方、御廣稲荷大明神について「秩父甲州往還」は全く触れられていません。この先で林道大輪線に合流し、道標「強石方面－大輪方面」・「大達原バス停方面」があります。左は大達原バス停、右は旧道が林道に拡幅された道です。



民家の傍の車道へ



御廣稲荷大明神



妙見社と稲荷社

三峯道を右に進むと前方右側の立派な石組みの上に大達原高札場があります。大達原高札場の説明板には「埼玉県指定史跡、大達原高札場、所在地；秩父市大滝 532 番地 1 地先、指定年月日；昭和 14 年 3 月 31 日、徳川時代における上意下達の方法として、各村々の中央又は代官・名主等の邸前に高札場が設けられた。この高札場は、甲信両国に通ずる秩父往還に面する旧名主山口家前にある。建物は高さ 1.3m の石積の壇の上に二本の親柱と二本の横木で生まれ、その上に切妻造の屋根をのせており、間口 2.3m、奥行 1.2m、高さ 2.4m で、これを囲んで高さ 1.18m の木柵を設けている。建築年代は文久年間（1861～1864）と推定される。平成 21 年 3 月、埼玉県教育委員会・秩父市教育委員会」の記載があり、三峯道（秩父往還）が高札場の前を通っていたことが分かります。また、別の案内板には「ようこそ大達原（おおだはら）へ 深い V 字谷が刻む大滝・大達原は荒川左岸の緩やかな尾根の中腹にあります。日当たりが良く暖かいが水が無く、東の沢から引いてきた水を大切にし、暮らしをたててきました。集落の名の由来は神奈川県の小田原。1590 年小田原城が豊臣秀

吉の軍に攻められ落城、配下の鉢形城（寄居町）も落城し重臣山口凶書守（やまぐちずしよのかみ＝文部大臣）ゆかりの「おだわら」を名乗りたかったが身の危険を感じ、音をもじって大達原にしたと伝わっています。以来、四百有余年、子孫、大滝村最後の村長山口民弥氏が今でもこの地に居住し、その歴史を繋いでいます。環境省／秩父市／奥秩父源流元気プロジェクト」が掲げられ、鉢形城の落城に伴い後北条の武士たちが移り住んだと伝わる大達原の地名の由来や歴史が記載されています。



車道（秩父往還）へ



大達原高札場



山口家

山口家は現在も高札場の横に居住し、門柱には「御方 山口家」の表札が古の歴史を今に留めています。その先右側に赤い鳥居の大達原稲荷神社が、街道を挟んで神楽殿と対峙しています。拝殿の中には小さな社が安置されていて「将門八幡社」と記されていました。大達原稲荷神社の説明板には「稲荷神社は商売繁盛の神様で日本各地に祀られていますが、当神社は格式高く神階は『正一位』である。地元の名だたる商売人らが参拝します。特に毎年4月に行われる例大祭には、大勢の参拝者が訪れます。元々は、山口家の氏神様（屋敷神）として祀られていましたが、非常にご利益があると口コミが広がり、一般の参拝者がお参りしやすいように現在の場所に移動し、道を整備したと言われていました。また、大昔、この地でも失くし物や困りごとを解決する予言者がいて、たくさんの方が訪れ解決され、現在でも失くし物を探すには効果があると言われていました。当神社の上舎（うわや）には、荒神（こうじん）様と八幡（はちまん）様も祀られており、いずれも別の場所から当神社へ合祀（ごうし）されたものです。荒神様は火を防ぐ神様として、台所などの火を使う所から火事にならないよう台所の神としてもお祀りされています。八幡様は将門八幡と言われ、平将門没落の際、その娘が落延びてこの地に円通寺という寺を創り、将門の霊を祀ったと言われていました。戦いの神様と言われ、現在では選挙の神様として地元の政治家が訪れています。環境省／秩父市／奥秩父源流元気プロジェクト」と地元民から商売繁盛や火防の神などとして厚く信仰されている歴史が記されています。また、水の確保が困難であった地域だけに、「火防の神」である三宝荒神が篤く信仰されたものと思われます。風土記稿には「塚八幡 里正多宮が小後にありて、僅の屋祠なり、往古平将門此邊に行營ありて、聯妃の居たまひし所なるよし、其後武器を埋て塚を築き、小祠を立しと云、」と記載があり、将門の武器を埋めた塚があったので、塚八幡と呼ばれたようです。更に、風土記稿に「大血川 土人傳へ云、此所にて将門の妃九十九人自害せしとて、今尚古塚存せり、さてもその時血の流ること、七日七夜に及べりと云ふより、地名となるよし、一説には重忠この邊にて誕生せし川筋なればと

て、於乳川と書せしとも云ふ」とあり、大血川の地名の由来となった平将門や畠山重忠の伝説が残る大達原でした。



大達原稲荷神社の鳥居



大達原稲荷神社



神楽殿

林道大輪線終点の標識を越えると右側に苔むした台座の上に自然石に彫られた庚申明王の石碑があります。梵字の下に庚申と刻され、左側に心願成就尊とあり、太陽と月の間に大きな円がくり貫かれています。珍しい形の庚申塔はどのような意味なのか詳細に調査すれば興味深い成果が得られる可能性があります。杉林に覆われた車道を下ると分岐・道標「神岡方面（三峯神社裏参道）－大輪方面（三峯神社表参道）－強石方面」があります。車道から左側の苔むした石段を下り、薄暗く鬱蒼とした樹林の中をしばらく進むと右側にお茶畑があり、突き当たりが「子育て地藏尊」と「見送り観音」です。



庚申明王



大輪への分岐



子育て地藏尊へ

子育て地藏尊と見送り観音の説明板には「この堂内に安置する仏像は左から◎聖観音（海川道中災難消滅、三峯山麓見送り観音）と書いてある。◎子育て地藏（大きなダルマ型石に赤ん坊を抱いた口地藏様のレリーフ、幼児の発熱等に霊験あり、下部に村中安全と刻まれている。）◎薬師如来（医薬を司る仏、三峯街道でよく見かけるが殊に眼病に効くといわれ、めの字の奉額多し）。弘法大師の四躰と言われている。みんな私どもに身近でなつかしく有難い仏たちである。」の記載があります。また、御堂上部に右から「弘法大師・薬師如来」、中央に「子育て地藏尊」、左に「聖観音・三峯山麓見送り観音・海川道中災難消滅」の扁額が掲げられています。子育て地藏尊は自然石に子供を抱いた地藏菩薩が浮彫されたもので、なんと珍しい造形です。薬師如来立像は赤い着物が掛けられていて、顔のみ確認できる状態でした。傍らの絵馬には「の」字と薬師堂と書かれていたので、かつては別に薬師堂があったのかも知れません。見送り観音は三峰信仰との関連が想像できますが、古い厨子の中に光背の付いた状態で安置され、色あせた赤い衣装を身に着けているのはどのような意味

なのか興味深い造形です。大滝村誌に「大輪の見送り観音 大輪地区の旧三峰参詣道沿いにある子育て地蔵堂にまつられている聖観音の背中には『三峰山麓見送り観音』と書かれています。通行する参拝者たちの安全を祈ってくだされ観音様だった。堂内には『子育て地蔵』（石像）と薬師如来像（木像）がいっしょに安置されている。」と記されています。素朴な中にも如何にも民間信仰らしく、地元の皆さんの信仰の篤さが感じられます。



子育て地蔵尊と見送り観音



子育て地蔵尊と薬師如来



見送り観音

三峯道を下ると竈三柱神社の横にでます。「秩父往還いまむかし」には見送り観音及び竈三柱神社に関する記述がありますが、「秩父甲州往還」には馬頭尊までの記録はありますが、見送り観音や竈三柱神社に関する記載がないため、国道までの道筋が今回歩いたコースと異なることも推測されます。竈三柱（かまどみはしら）神社の境内にある説明板には「御由緒 旧大滝村の総鎮守・火防の神様 当社の鎮座する旧大滝村は、県の西端に位置し、2000メートル級の山々がそびえる秩父多摩甲斐国立公園の中にあり、その地名は、この地に源を発する荒川の奔流が大滝のごとく見えたことによると伝えられている。元来、当社は三宝荒神社と称し、弘仁年間（810～824）の創建と伝えられ、東国の女人高野として信仰を集めている臨済宗大日向山大陽寺の境内に古くから祀られていた社であった。それが明治維新後、神仏判然令により、竈三柱神社と改称の上、同時に隣接した村の共有地へ移され、旧大滝村の村社となった。時に明治二年（1869）のことである。しかし、鎮座は大血川の上流、妙法ヶ岳の山中で参拝には不便であるとの理由から昭和16年（1941）に現在の鎮座地である字大輪の和田神社の旧境内地へ移され、今日に至っている。和田神社は、古くは妙見社と称し、大輪の鎮守として奉斎されてきた社であったが、明治41年（1908）当社に合祀され、遥拝所となっていたもので、当社遷宮に当たっては拝殿の増築や境内の整備がなされた。祭神は、火産霊神（ほむすびのかみ）・奥津比古神（おくつひこのかみ）・奥津比賣神（おくつひめのかみ）の大神三神に和田神社の祭神であった少彦名命を加えた四柱である。これらの神々を祀る本殿は一間社流造りで、各部に彫刻が施された立派なものである。○御祭日：元旦祭（1月1日）、例祭（5月第2日曜日）、和田神社祭礼（7月第2日曜日）」と記されています。竈三柱神社は大輪の鎮守ですが、明治末期に元々あった和田神社（妙見社）に合祀されたことが示されています。一方、社殿の前の古い竈三柱神社の説明板には「この神は奥津比古神・奥津比賣神・火産霊神の三柱で、古くは大血川の大陽寺に隣接してまつられていたが、余りにも山口のため、多勢の参拝に不便ということから風雲号を□□る昭和16年現在地に遷座（おうつし）した。ご祭神は三柱とも火の守り神で、家庭内の守護神として講組織があり、

村中の信仰を集めている。元村社、大滝村の総鎮守で、例祭は5月11日、村の鎮守の神さまの今日のはめでたいお祭り日と多勢の参拝で終日賑わう。」と記載があり、一部、判読できない文字が含まれますが大陽寺との関連は興味深いことです。社殿の左側に元々あった和田神社があり、その後ろに多数の石仏・石碑が並んでいますが、何かの事情でこの地に集められたものと推測されます。奉待日天子供養（享保十九年）、奉納秩父坂東西国巡禮□□□（元文二年？）、奉読誦大乘妙典千部為先祖菩提、奉参詣富士浅間湯殿山、奉待勢至菩薩供養（□□十九年）及び妙典六十六部塔などの文字が確認できます。



竈三柱神社への道



竈三柱神社



和田神社

また、鳥居の横の御大典記念碑には「三峯神社宮司廣瀬和俊篆額 当神社は大滝村の総鎮守として古来大日向山に鎮座したが、彼の昭和の戦時中出征兵士の祈願参拝多きを加えたので、氏子の熱望に応じて昭和十六年の和田の社に御遷座申し上げたのであった。以来あたかも半世紀を経て彼の激動の昭和の御代から平成の新代を迎えて、ここに畏くも第二百五代の天皇陛下には平成二年の秋、御即位大礼の諸儀を滞りなく行わせられ、天つ日嗣と共に窮りなく常磐にましますことは国民の齋しく慶賀に堪えないところ、当社に於いても奉祝の微衷を捧げむとのと、氏子相寄り相諮って御大礼記念事業を興し、御神前に大太鼓の新調、御祭礼用御旗杭の改築と大幟の新調、並びに国旗掲揚塔の新設を志したところ、この碑面に見られるような誠心溢れる奉賛に接して奉祝事業の円滑な進展を見、本日めでたく記念碑の除幕式に至った。われら一同この感激を忘れることなく打ち建てた記念碑とともに慶祝の心を後世に伝える。平成四年五月八日、例祭の吉辰、撰文並謹書 宮司 新井 啓」と刻まれ、出征兵士の武運を祈るための竈三柱神社として、大陽寺の傍からこの和田神社に隣に遷座したことが記され、三峯神社との結びつきの強さが示されています。



摂社・末社等



奉待日天子供養



竈三柱神社の鳥居

神社の正面にある鳥居を潜って石段を下ると国道140号に出ます。大輪方面に10分程歩くと大輪の三峯神社一之鳥居につきます。この鳥居は元々贅川宿の入口に設置されていた

ものを大輪に移したことが知られています。大輪バス停近くにある三峰山ハイキングコース案内図には「三峰山表参道（大輪三峰線歩道） 大輪（おおわ）から三峯神社へ上がる道は、『三峰山表参道』と呼ばれ、江戸時代以前から続く三峯神社への参詣道である。大輪は表参道の入口にあたり、三峰の門前町として栄えた。一之鳥居（いちのとりい）は明治20年（1887）に奉納されたもので、荒川贅川宿から明治42年（1909）にここに移された。朱塗りの登龍橋は、大正3年（1914）に架け替えられた。今の橋は昭和29年（1954）のものである。昭和14年（1939）三峰空中ケーブル（三峰ロープウェイ：平成19年（2007）廃止）が開通するまでは、徒歩で五十二の丁目石を数えながら登った。」と記されています。一之鳥居の由緒や表参道・裏参道の紹介が記されていて往時を偲ぶことができます。登龍橋で荒川を渡り、三峯神社表参道入口につくと左側に五十二丁の最初の丁目石があります。風土記稿には「大輪橋 三峯山にて造る。岡本組の内字大輪にあり、荒川に架して、三峯山へ通ふ獨木にて、長さ十九間四尺、幅二尺八寸、左右に僅ばかりの手すりあり、水際まで三丈許、兩岸盤岩対峙していと険し、」とあり、元の大輪橋は三峯山が参詣者の為に造った丸木橋でした。前述の幸田露伴著「知々夫紀行」に「十七、八もあるべき橋の折れ曲りて此方より彼方にわたれるが、その幅わずか三尺ばかりにして、しかも処々腐ちたれば、脚の下の荒川の水の青み渡りて流るるを見るにつけ、さすがに胸つぶれて心易からず。渡りわずらうばかりなり。むかしは独木橋（まるきばし）なりしといえはその恐ろしさいばかりなかりしならん。」と記し、現在の登龍橋からは想像もできない危ない橋であったことが理解できます。大輪の大鳥居の周辺で栄えていた吉田屋及び紅乃屋などの店は既に閉じられていて、残念ながら往時の面影は感じられません。大輪バス停から西武観光バスで三峰口駅に戻りました。



大輪の三峯神社一之鳥居



登龍橋



五十二丁目石

参考文献

- 歴史の道調査報告書・第11集・秩父甲州往還（編集・埼玉県教育委員会、埼玉県立博物館）、発行・埼玉県県政情報資料室、平成二年四月発行
- 古道調査・秩父往還（贅川宿～猪鼻～強石）下見調査報告書
- 古道調査・秩父往還（三峰口駅・巢場新道～強石～杉ノ峠～落合）下見調査報告書
- 大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第12巻）・秩父郡・古大瀧村及び新大瀧村（雄山閣）、昭和四十六年二月二十五日発行

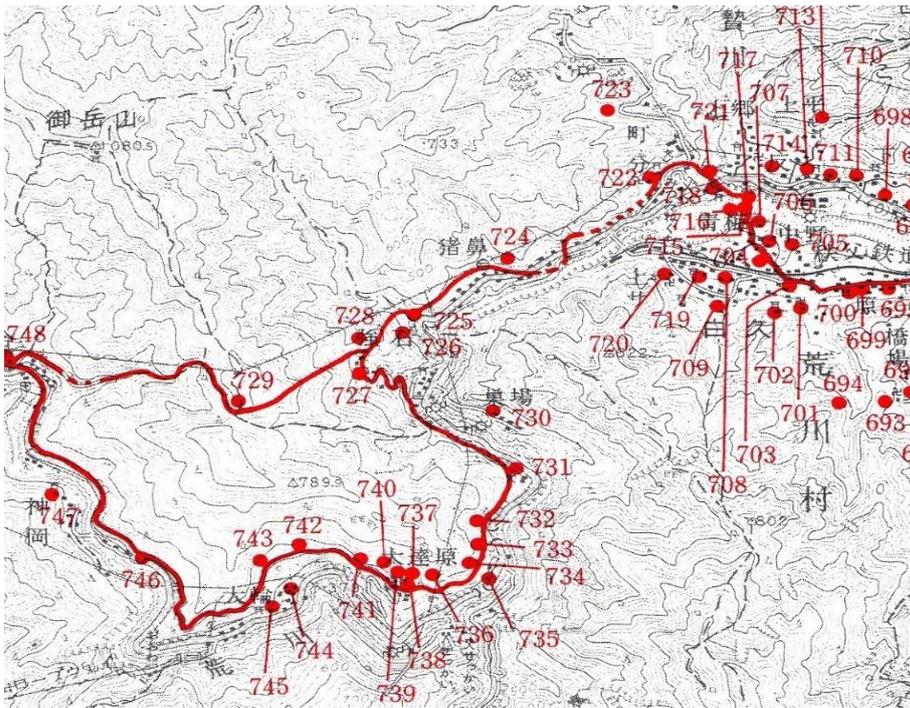
- 明治 43 年測図 5 万分の 1 地形図「三峰」
- 大滝村誌、編集・秩父市大滝村誌編さん委員会、発行・秩父市、
平成二三（2011 年）三月三十一日発行
- 飯野頼治著「秩父往還いまむかし」（さきたま双書）、平成 11 年 2 月 25 日発行
- 幸田露伴著「知々夫紀行」（山の旅 明治・大正編、近藤信行編、岩波文庫）、
2003 年 9 月 17 日発行
- YAMAP GPS データ（国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図）「三峰」



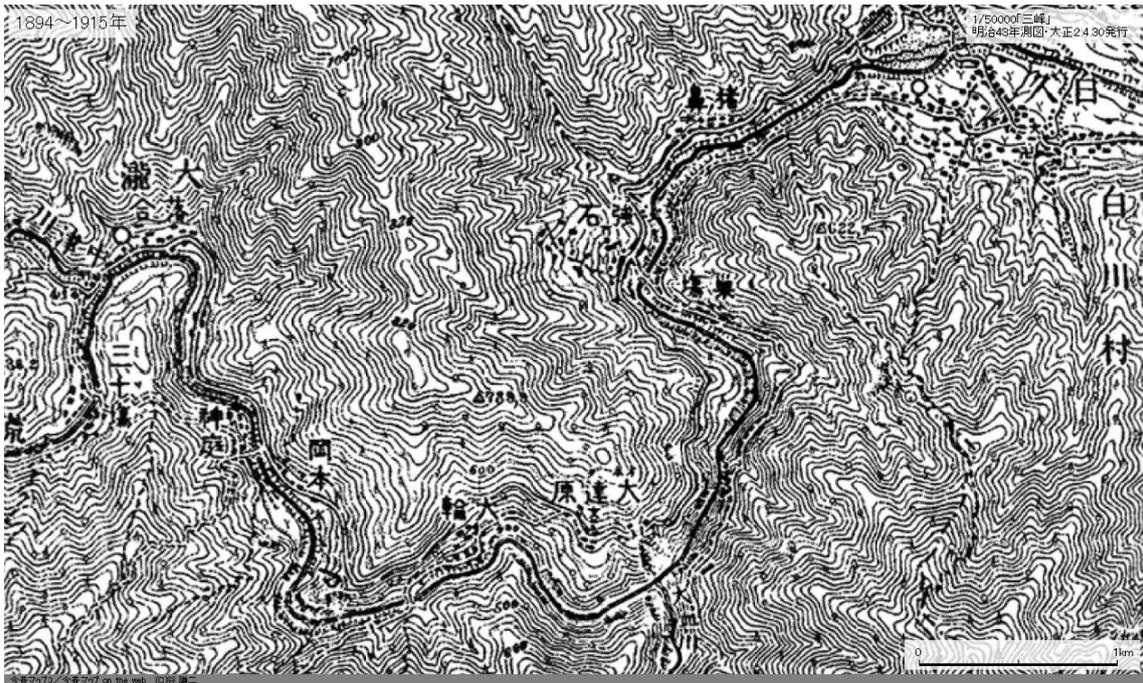
巣場新道にて



手掘り隧道前にて

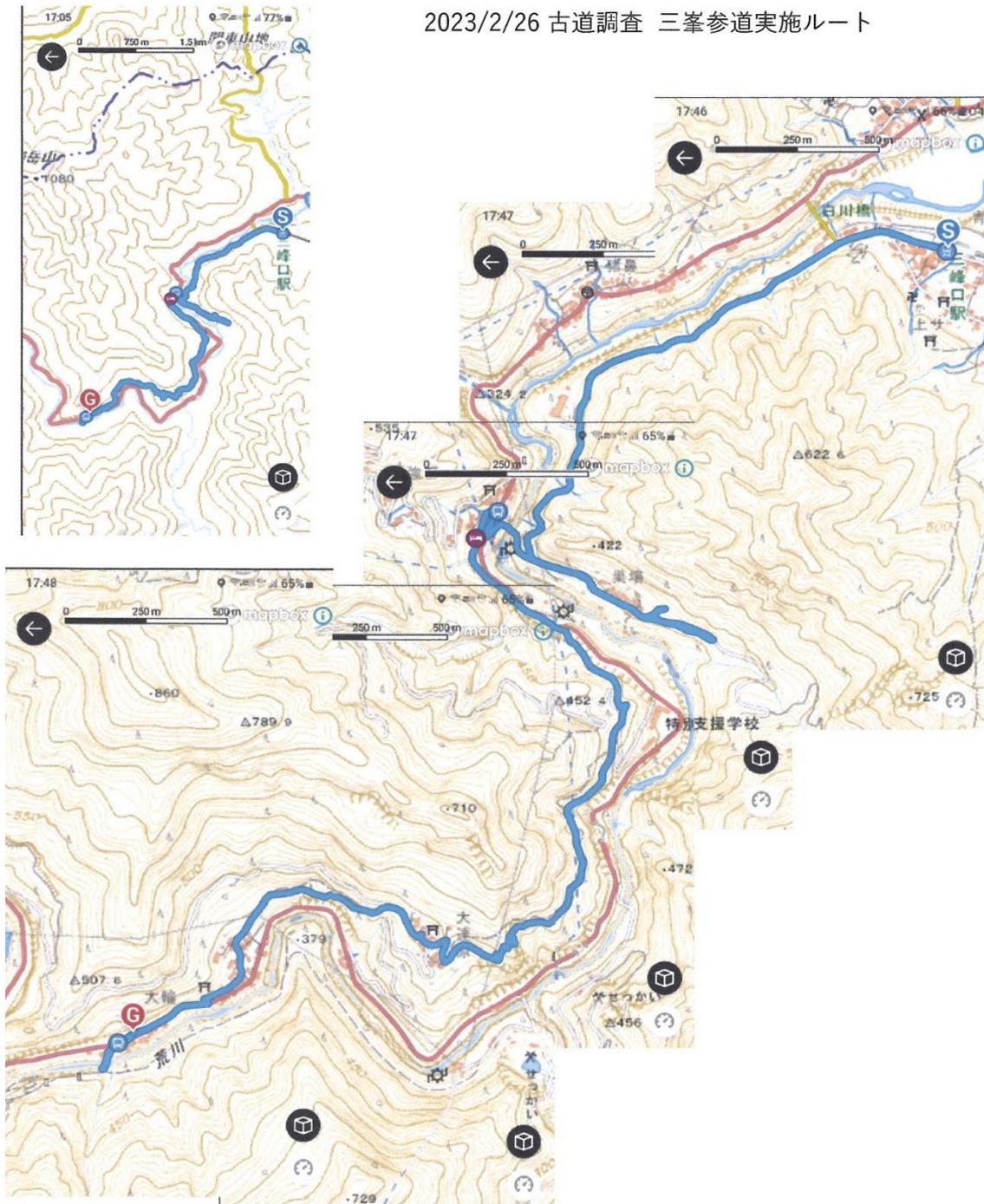


「秩父甲州往還」より



明治43年測図・5万分の1地形図「三峰」

2023/2/26 古道調査 三峯参道実施ルート



YAMAP GPS データ